宗像

毎月一日発行
定価一年送料共500円
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊26番

第九回たなばた揮毫会

大島へ！父兄同伴の献書会

七月初旬、たなばた揮毫会運営委員会は、宗像郡内小中学校に今年の参加要項を送り、各校各学年別に予選を行う事、なるべく筆績優秀な生徒を参加させて欲しい旨を要望した。よって予選締切りは七月十日。予選審査を七月十二日に行い、入選者を当日学校宛に通知した。かくして第九回たなばた揮毫会は梅雨明けの七月二十三日大島中津宮に於て開催されるに至った。

この日は早朝から雲一つなく、晴れ渡った空に太陽がギラギラと照り輝き、玄海の海原も波静かで真夏の光を照り返した。

早朝から郡内の良い子達は父兄同伴で、紙、筆墨、文鎮等を小脇にかかえて神湊の波止場に群集した。渡海船の弁天丸は文字通り鈴生りの超満員であった。

例年の通り大島小中学校が揮毫の会場に宛てられたが、参加者が多いので、四回に分けて筆書する事になった。

集った郡内の良い子達は凡そ八百名、父兄も含めると約千八百名余りで、この日は大島中が中津宮揮毫会で賑わった。

会場では、本人よりも父兄の方が熱心で、一生懸命墨をすったり、吾が子の手をとって運筆に勤しむママさん方等、傍目にも涙ぐましい努力であった。

なかでもA小学校の三年生N君は右手首切断と云う不運にもめげず、この揮毫会に参加、左腕で健筆を振っていた事は印象深かった。

会場の教室でそれぞれ一応の練習の後、制限時間一杯で、父兄は教室よりの廊下へ出され、先生の見守るもとで一点一画を一生懸命書いていた。なかには四五枚書いて廻って来た審査の先生に選んで貰っているちゃっかりした生徒もいた。

書いた二枚を会場から中津宮に持参して、当社から御神薬をいただき、審査発表のある三時頃まで大島の海辺で海水浴を楽しんでいた。

一方、中津宮拝殿では、次々に献書された作品を審査の先生方が汗だくで選んでいた。

審査には古賀啓水氏、坂口雅風氏、城戸筑山氏、田和宣風氏の四氏があたられた。

午後三時審査終了。入選作品は中津宮拝殿の神垣に貼り出された。これと同時に「第九回中津宮揮毫大会審査会」を斎行。終って久保宮司より挨拶があった。

「炎天の中を多数お集りいただき感謝に堪えない。日頃練習に励まれた成果を精一杯発揮されたことと思います。野球、剣道、体操等、何に限らず、いざという時には日頃の練習の結果が現われるものです。これからも一層この道に励んで、来年もまた揃って揮毫会に参加されるよう、更にこの会の発展するよう願います。審査のため遠路をお越しいただいた諸先生方の御労苦に感謝すると共に、将来ともよろしくお願い申し上げる次第でございます」

大よそ右の要旨であった。

次いで表彰状と賞品が久保宮司の手によって渡され、特選の栄誉を得たよい子の顔が輝やいた。

続いて福岡書道会の先生方から適切な講評があり、かくて今年の揮毫会も無事に盛大に終了した。

中津宮揮毫会と銘うって今年で第九回、大島中学校で独自に揮毫会をはじめてから既に十七回。県下でも最も長い伝統を有するといわれる。この日の行事の為には大島の村を挙げての協力が見られ、殊に大島村敬婦人会の人等は賄やら諸般の雑務やらに大忙であった。

過去九年間の此の会の日に海が荒れた事は無いと云う。不思議なことです。まさによい子等に対する御神慮でもありましょうか、との声も聞かれた。

来年は十周年に当る。関係者一同このことについて話し合うところがあり、来年の会を記念大会として盛大に催行することを申し合わせた。

（入選者氏名四面）

暑中御見舞申し上げます

昭和三十九年盛夏

宗像大社宮司　久保輝雄
職員一同
宗像編集部

宗像大社御用達
装束神具
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 371 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

論説　三力

――この小論を実社会一年生の子弟に与える――

俗に三役とか三羽烏とかの呼称はあるけれど、三力などはなかろう。これは学力能力努力の三者の謂いで、心驕った浮薄な一部の芸能人が埋解離婚という新語を製造する今日、ご容赦を願いたい。

学力能力それに努力、いづれも世に処するに必要な要素である。この三力が十分に生かされているか、綜合的な活動力となって発現されているか、その内省は秀れた人物ほど強い。自己を顧る尺度の発見は極めて困難なことではあるが、慎重な内省がそれを捉える。よくもこれで大学出と言えたものだと寒心したり、逆によくもこれで二度も落第したものだと不審思ったり、これは優等のナマクラと劣等の逆材との極端な対照だが、共に実在する。実社会は一日一事が凡てやり直しのきかぬ試験であって、三力の綜合点数に深い内省がいることになる。

ずっと以前就職難深刻の頃「大学は出たけれど」という映画があった。それは当時の社会情勢の不調を諷刺したものだったが、若い学校出の学力能力の低劣を指摘する経営者の「大学は出ているけれど」の噂声は少くないようだ。

実社会は卒業証書の展覧会ではない。いくら立派な成績証明書を列べて見せても事業体の発展は望めない。むしろ実力の伴わぬ学歴の誇示や、肩書の自負はマイナスとなる。在学中成績の点数かせぎに熱中して、まじめな人物と評価される者の中には、現場のことは上手にやれても応用能力のない者が多く見られる。概してこんな人物が成績優秀の虚名のレッテルを貼られて、よき職場の上き位置に就き易い。そして後日採用した幹部が嘆息する。創造性に乏しい欠陥が多く見られる。

無能は偽装する。能力のない者ほど口巾ったく精緻を呼び易い。嫉妬と焦燥は遂に自己の仕事に対する力量を忘却、或は過信して、所謂身の程を知らぬ表面的小細工や出世工作の偽装に浮身をやつすことになる。暗夜にひかに上司の門を敲くなどは、その微候である。時としては保身出世の補強作戦として、家柄閥歴を偽装材料に用い、親族の有力者を等に着たりして、粉飾に餘念がない。こうなると自己を顧る尺度の発見など問題でなく、事業体全般の態勢を洞察する明智の片鱗も残らず、笑止の沙汰を演ずるのである。

事理の適確な判断は頭の回転による。能力に点数の限界はない。努力が能力の推進器となって倦まず撓まず回転すれば、仕事はみごとに満点の成果を挙げることが出来る。誠実と勤勉が努力の推進器となって成した人物の足跡がよくこれを物語ってくれている。

或る大会社の社長が新入社員に与える開口一番の訓示は「卒業証書を捨てろ」であると聞く。事業体の一員となった彼等には、もはや卒業証書は不用であろう。如何に三力を発揮して自己を向上させ、担当の業務を快く処理進展せしめるか、今後の課題であって、個人々々の持つ学力能力に応じた活用態勢を整えることが、有機体天性とは限らぬ。誠実と勤勉の努力が学力を更に充実してゆき、よりよき明日への反省が頭の回転を機敏適切にする能力を培ってゆくであろう。

必要なる機会は自ら進取せよ。意志ある所に道はひらける。

章志ある所に道はひらける。

価値同情、偽装の追従、肩書の魅力などに盲眼を装うしてはならない。不足なる能力は自己の責任で補充せよ。

申訳あるまい。（白雲）

阿蒙少言

日曜日、家族連れの魚釣り客の往来しきり、亭主関白の位を退いて互助倶楽の家庭は見ていても喜ばしい。本来女性は男性と同じ地位にあるべきもの、と古過ぎる古代の真姿に還ったと言えよう。○戦後強くなったものは、女房と蚊下だと世評である。前者はもとく強いので戦後の激変ではない。発表力を発揮していた封建思想の残滓が払拭されただけ。後者はスフの時代報恩のように修理風景を見たのが、原料の豊富と科学力の進歩によって丈夫になっただけ。主婦の苦労は減ったが、蚊下業者は破れ易い頃の売行を懐しがる。女性も蚊下も強い方がよい。○不束な娘ですが、と縁談。不束な者をすめるは小外とあいそのない返事。お茶お華など一通り修業の出来るお嬢さんですが、と世話好き夫人が推薦すれば、貧乏お嬢さんは貧乏暇なしの返事。○近頃の若者は自己中心で、人事の公正を指針として適材適所主義をもって育成してゆくなら、事業の繁栄と多数の幸福は敢えて説く要はない。

三力は必要なる機会が磨きをかけてくれる。学力は学校だけで養うものでない。能力また凡てが先天性とは限らぬ。誠実と勤勉の努力は学力能力を更に充実してゆき、よって適材適所主義をもって育成してゆくなら、事業の繁栄と多数の幸福は敢えて説く要はない。

三力は必要なる機会が磨きをかけてくれる。学力は学校だけで養うものでない。能力また凡てが先天性とは限らぬ。誠実と勤勉の努力は学力能力を更に充実してゆき、よって適材適所主義をもって育成してゆくなら、事業の繁栄と多数の幸福は敢えて説く要はない。

第九回 宗像大社献詠歌会詠草

七月四日　於社務所詠草到着順

吾れも亦敬人の席につらなりて数刻腸を洗ひけりしが　福岡　高橋　昇

梵院も住めば三界憂き事の心を灯す南無観世音　神湊　隣船　俊

斧入れて伐らむとすると思ひつつ人々あふぐ奥山の杉　熊本　吉田　寧雄

村山田　吉田佐市郎

葉殿火に暮れ谷間の照り映えて麦連び行く人影を見ゆ　小倉　大和　虎雄

椎若葉波うつとく寒返へる五月の風はまさに光れり　飯塚　萩本　夕照

窗飾りてはにかみてゐる花嫁のうしろに鎮り椅子をすすむる　香椎　織田　橡雨

斎蔵のかしこきまさを上書葉なす対へる山も神さびて見ゆ（宝物殿を見て）　勝浦　永島意之助

老ぬれば人の情の身にしみて涙こぼるることの多かり　村山田　金丸　柳蔵

四ツ叉で土気りあげる麦のあと畦挙りて行く休み日の吾は　南郷　恵尾郷　須恵

梅雨あけて海恋ふ磯となりにけり湊の岸に鎮崎の浜　東郷　吉田　信夫

あはや蔵小大を避けてゆくバスの運転手の顔をそと仰ぎ見る　宮田　片山　一

柿若葉やさしく光る雑に鶏舎ふ間なく風に揺らるる　門司　永島　まち

氏神の宵像大社を辞りるし夫の遺影を抱きおろがむ　福間　井原　元彦

ほのぼのと東の空の白むころはやく起き出でし池の鯉かも　東郷　小野角次郎

早苗取る乙女の手先あざやかに小雨をほろる黄昏の水面　〃　小野　花居

葉殿火を孫にせがまれ夕やみの川堤行けば顔も赤らに　筑邦　津留崎初子

走るこの鈴ふりならす駅馬車にゆられてアイヌ部落へ向ふ　盛永　邦夫

毎朝の刻を告げくる鐘にしてそは日日の安らぎをもつ　曲　〃

ほのぼのと東の空の白むころはやく起き出でし池の鯉かも　東郷　小野角次郎

早苗取る乙女の手先あざやかに小雨をほろる黄昏の水面　〃　小野　花居

葉殿火を孫にせがまれ夕やみの川堤行けば顔も赤らに　筑邦　津留崎初子

走るこの鈴ふりならす駅馬車にゆられてアイヌ部落へ向ふ　盛永　邦夫

毎朝の刻を告げくる鐘にしてそは日日の安らぎをもつ　曲　〃

つゆの雨今日も降りつ窓下のあじさいの花土に伏し居り　〃　立石ろせの

（四頁へ続く）

吉留　山下しづえ

子に送る便り書き終へ窓見れば

ヨリの風なく梅雨霧つ　若松　大高　岩吉

捨てられし親の心をしたはずに育てられたる心したへよ　江口　辻野　開造

ながいきはしたきものと年金を顔ほころばせいただくおくな　内浦　長畑　房江

陽の出の位置南に寄り北に寄りて我が臥す窓の四季くり返す　大濠　江崎　琴子

五月雨に庭のみどりのいやましゆかりの色に匂ふ紫陽花（庭の紫陽花を見て）　多礼　藤崎保五郎

学びやにいそしむ吾が子かへり来て夕の膳は笑顔にみつ　津屋崎　麦野　時雄

境内は青葉若葉の波立ちて五十メーター法隆寺の塔　香椎　桜井　秀

草屋根の郷びゆかしみ訪ひ来れば篤の音の響みて人なし　香椎　桜井　ツ子

涼やかに鳴くすだれを娯しめばかひくくつつ家妻われは　須恵　尾郷　須恵

ハラリ落ちて朴の一葉の音立てつ病める鬼現き窓に来し時　勝浦　永島　計七

ふる里はなつかしきかも田に立てる勇の姿その祖父に似て　吉田　占部　由久

恋の浦ゆ水平線に沈む陽の絢爛さただ息のみて見る　田島　小野　迪夫

梅雨に打たれこぼれつつ咲く白薔薇を朝も門辺に見すぐしがたき　〃　深田　嘉子

うとまれし日の夕べにも咲きて居しを花を供へて異母妹我は　〃　吉武　俊次

亡き妻の夢よりさめし真夜中に五月雨の音窓の辺にきく　武丸　立石　昇

満月は銭き光を放ち居り田植終れるタべれの道　〃　立石ろせの

つゆの雨今日も降りつ窓下のあじさいの花土に伏し居り　（四頁へ続く）

玄界灘の海開き

去る七月九日、玄界灘に面した神湊の海浜に於て夏の海開き祭が盛大に行われた。

この日は、玄海町主催の海開きと八幡製鉄玄海荘の海開きが同時に行われ、いずれも当社職員が奉仕した。

折りから、風が強く、海浜に据え立てた真榊が風にはたはたと鳴った。処が奇しくも祭典開始の十一時にはピタリと風が治って絶好の海開き日和となった。

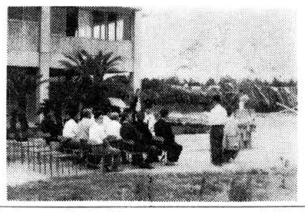
玄海町主催の海開きは玄海旅館の下の浜で厳かに斎行された。

蒼く澄み渡った海原を見渡して緑の真榊が立てられ、〆縄が張りめぐらされて海の幸、山の幸が供えられた。

此の浜辺に潮浴の設備種々に作り構え、今日を生日の足日と斎い定めて海水浴場開きの式典行わむと関係う諸人等午前に参列り……浪穏やかに伊群れつつ心足らいに泳ぎ楽しみ遊び戯むる中にも八十潮津日の福事有しめ給わず……此の夏を健やかに晴れやかに過さしめ給い玄界灘寄せくる波の懇に……

玄海町町長、宗像署長を始め関係者四十数名、又、小学校の児童達の代表四十余名が参列して今年の海水浴の安全を願って敬虔な祈りを捧げた。この後、米屋旅館に於て厳粛な直会が行われた。

一方、玄海荘海開き祭は、八幡製鉄本社、玄海荘、地元各関係団体代表等凡そ二〇名参列の下に厳かに斎行された。玄界灘の浪風穏と祈る心は、祭員参列者共に宗像大神の鎮り座す神籬の前に深く額づかせた、思えば今年も傷ましい水の犠牲者は、毎日の新聞に報道され社会に警鐘を与えている。しかし個々人に注意だけで災いは防ぎきれるものではない、それに加うるに、その地域社会の住民、各関係者の水難防止へのひたむきな祈りが結集されて始めて完璧なものとなる。



祝詞が奉上せられた。

宗像大社　八月祭

一日　夏季大祭　午前十時

前日の「夏越祭」にひきつづいて行なわれる。一年の中の季節にあたって国家隆昌、産業繁栄、文化振興、五穀豊穣、大漁満足の大祈願祭が行なわれ、この他特に交通安全大祈願祭が行なわれる。

二日　夏季大祭　午前十時

七日　たなばた祭　午後八時

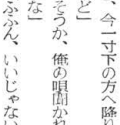
中津宮境内にある末社奉宮、織女社で祭典が行なわれる。

この日までに習字して献書すれば書道が上達すると云われ、このほか古くから恋愛成就祈願の伝説を秘め、伝統の七夕飾が行なわれる。一千年の伝統がある。

八月の交通訓

拝んだ心で
ハンドルを握ろう

宗像談話室　蜜柑山



〈うちの御奪さんな　がらがら
柿よ　見かけれど　渋うこざる　よういよい

〈おろろいろろい云うて　眠る子の可愛さ　起きて泣く子の　面憎さ　どうかとうか

籔の中に坐って聞いていた澄夫は何故か動けなくなってしまった。そして、どうしたのか独りで顔が赤くなった。

澄夫とエミ子は同じ部落うつに住んでいたが、近頃は余り口を利かなかった。小さい時は一緒に遊んだ事もあったが、お互いに大人になってみるとそうも行かなくなっていた。年に何回かの五体をガタガタと揺すった。たまりかねて澄夫が唄い出した。

〈エミ子よう聞け　五月の山に
俺とお前と　二人きり　よういよい

野太い声であった。田島のお宮の風俗舞の部員でもある彼の声にうであった。快よい初夏のそよ風が響き渡った。

突然隣りの畑から唄い出されたのでエミ子が驚いた。はっとして声の方に視線をやった時、すっくと立ち上った澄夫が照れ臭そうな表情で唄い続けていた。

遅ましい男の声は、エミ子の頭から足先まで麻痺をかけた様に突き通った。

「おいエミ子、そのお茶を一杯くれんか」

「澄夫さんだったの、吃驚したわあ」

「いや、ごめんごめん、あんまり良い声だったもんでなあ、――ところで今日はエミ子一人で山へ来とるのか」

「ううん、おっ母さんも来てるわよ、今一寸下の方へ降りて行ったけど」

「そうか、俺の唄聞かれなかったかな」

「ふふん、いいじゃないの、聞かれたって――」

「ほ、ほんとに――、ほんとにいいのか」

この言葉は、事実上の求愛に等しかった。

遠く北の方に玄界灘が霞んでいた。東の方にくっきりと四塚連山がそびえている。七に生きる者のみが味わうことの出来る自然の風物であった。

「誰やら声がとったが――、おや、澄夫さんだったのかね」

エミ子の母親が現われた。

「お母さん、澄夫さんねえ、私に お嫁さんになっていうのよ」

「ええっ？　おや、そうかい」

「あの、おばさん、ぼく、エミ子が好きです」

言葉の終った時には、澄夫の姿は山道を転がる様に下っていた。

×　×

澄夫は仕事の手を休めて聞き惚れた。いい声だと思った。それから、澄夫はそっと隣りの畑の方へ近寄って行った。音をさせない様に潅木を掻き別けて覗してみると、隣りの畑ではエミ子がこっと休みしてお茶を飲んでいる処であった。

定例夏季評議員会

去る七月十日、氏子評議員会が参集した。

社務所に於いて開催、妻野副会長の開会の辞に次いで庄村氏子会長・久保宮司の挨拶、続いて夏季大祭事発表、人形、献米袋配布並び献米取纒方の協力を依頼した。

猶当日、神社側から、久保宮司、小野権宮司、宇都宮祢宜、丹谷権祢宜、庄村氏子会長始め、郡内各地区評議員と地元総代約十名が参集した。

因みに夏季大祭次第は七月三十一日、午後五時、夏越祭・八月一日午前八時、高宮及地主祭、同時祭夕事発表、人形、献米袋配布並び献米取纒方の協力を依頼した。

猶当日、神社側から、久保宮司、小野権宮司、宇都宮祢宜、丹谷権祢宜、庄村氏子会長始め、郡内各地区評議員と地元総代約十名が参集した。

因みに夏季大祭次第は七月三十一日、午後五時、夏越祭・八月一日午前八時、高宮及地主祭、同時祭夕事発表、人形、献米袋配布並び献米取纒方の協力を依頼した。

同月二日の両日午前十時、夏季大祭、神賑行事として七月三十一日夜、境内広場に於いて映画が上映される。

中津宮敬神婦人会
英彦山神社参拝紀行

遥か雲海の切目に阿蘇を始め高峯の連山の頂が墨絵の如く浮かび、その美観にしばし見入り吾を忘れた。

ふと山の冷気に正気に帰り、あたりを見ると、何時の間にか霧に囲まれ、一寸先も見えぬ異状の天候の変化に、恐懼を感じ、急ぎ下山にかかった。

これは七月六日当大社中津宮、敬神婦人会十八名、案内は当社職員一名の一行である。

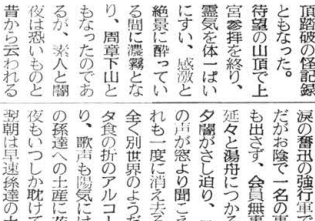
大島を早朝に出船、神湊でマイクロバスに乗り替え、二時間の超スピードで彦山町に着き、英彦山神社参拝、山頂踏破を行なった。

柏木会長は所用の為同行出来なかったが、本田副会長を始め、七十代四、五名あとは皆六十代の妙齢？の御婦人ばかりで案内の職員は実に色を添つべき黒一点であった。

さて童謡ではないが、行きはよいよいでバスの往路は快適、舗装道路の如く誠に滑かに、過ぎし明治天之のさを華やかなりし頃時代の歌ときけなく続き、ガイド嬢の案内も聞きとれぬ程のおしゃべり旅路であった。

大変に和やかな旅路であった。

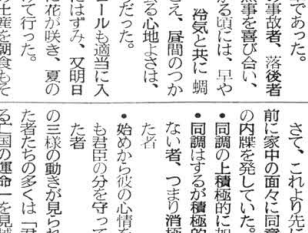
愈々目的地の旅館に案内され、早目に昼食をすませ、各自草鞋を穿つべく黒一点の御婦人ばかりで案内の職員は実に色を添つべき黒一点であった。



さて童謡ではないが、行きはよいよいでバスの往路は快適、舗装道路の如く誠に滑かに、過ぎし明治天之のさを華やかなりし頃時代の歌ときけなく続き、ガイド嬢の案内も聞きとれぬ程のおしゃべり旅路であった。

大変に和やかな旅路であった。

愈々目的地の旅館に案内され、早目に昼食をすませ、各自草鞋を穿つべく黒一点の御婦人ばかりで案内の職員は実に色を添つべき黒一点であった。



御承知の事と思いますが、英彦山は海抜二〇〇米、然も三つの岳でなり、中を中岳と称し、上宮が御鎮座まし、天孫降命を祭神として祭祀されて居ります。

その南岳南岳、反対を北岳と称し、昔より之の三岳を修行場として行者に尊ばれた峻厳な霊地であります。

下山のコース約四時間半にも及び、難行苦行は語るも涙、聞くも涙の奮戦の強行軍であった。

だがお陰で一名の事故者、落後者も出さず、会員無事を喜び合い、延々と湯村につかる頃には、早夕闇がさし迫り、疲労と共に蜘の声が窓より聞こえ、展開のつかれも一度に消え去る心地よさは、全く別世界のようだった。

夕食の折のアルコールも適当に入り、歌声も賑やにはずみ、又明日の孫達への土産に花が咲き、夏の夜もいつしか耽けて行った。

翌朝は早速孫達の土産を朝食もそそろ、売店のおばさんはニコニコの恵比寿顔だった。

復路は英大な高須原の草原、若杉の原を横切り、高住神社に詣で反転して、愈々懐しの帰路についた。

社務日誌抄

六月一五日　月次祭斎行。建設省友田計画官、北九州市観光課長来社。

一七日　雷電神社宮司来社。

二一日　日高工務店社務所増築工事の為来社。八幡製鉄庶務係長来社

二八日　社務所増築奉告祭

二九日　斎藤権祢宜支部会へ出席

三〇日　六月大祓午後五時より斎行。

七月一日　福岡県観光運盟参拝

三日　神社本庁調査部長来社

四日　福岡市中央高校父母教師会参拝。

五日　神社本庁財務部長来社

七日　宇都宮祢宜大島敬神婦人会を名草英彦山へ。

九日　神湊海水浴開き。

十日　評議員会開催。責任役員視察旅行。

一四日　書道講座、茶華道講座

宗像四郎氏貞（十八）

福田長庵　画　　山下半可　作

筑山煙上（三）

天文二十年八月二十八日、陶尾張守隆房は遂に蜂起した。数千の軍兵を率いて来島嘉の若山城を出た彼は、一気に山口指して進軍した。

物見の報告によって山口は上を下への大混乱となった。義隆はとりあえず三千の手勢をまとめて法泉寺に入った。しかしここは一時しのぎの場所であって持久戦には適しなかった。幸いこの月の九日より筑前宗像から勤番中であった黒川刑部（宗像氏男）と香月次郎左衛門隆光の手勢五百余騎が平把ケ嶽の前線に押し出して時を稼いでくれた。

宗像氏男らは丁度勤番の為に参詣した所にこの難に遭った訳である。つい先日、十一日に相良武任を介して参勤の挨拶を言上したばかりであった。その時筑山御殿に於て義隆は

「遂国の参勤神妙である」

と上機嫌で話しかけ大友、島津の動きと九州関係のことをいろいろ談合したばかりであった。

さて、これより先に陶は謀叛の前に家中の面々に同意を求める為の内諜を発していた。これには

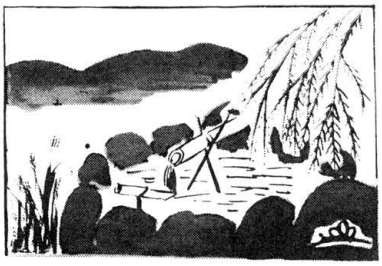
・同調はするが積極的に加担する者

・積極的には加担しない者、つまり消極的に応援した者

・始めから彼の心情を理解し乍らも君臣の分を守って主君についた者

の三様の動きが見られた。加担した者たちの多くは「君側の奸による国の運命」を見越した上での参加であった。積極的には加担しなかった者らは、矢張り大義名分に反するこの立場であったろう。この者らは多分に家中抗争の行方を自家に有利に持って行こうとの下心があったかもしれない。この派の巨頭に毛利元就がいた。

この二月、梅の咲く斎の訪れと共に、義隆は再び陶の許容出仕勧告の使者を出した。いつぞやの秋の時雨の夜に彼なりに考えて陶に対して「時を籍した」上での処置であった。これに対する尾張守からの返事は無かった。義隆側近の杉重矩らが激怒した。最近何かにつけて遠慮がちであった相良武任までが時を得顔に陶を攻撃し出した。彼等の策謀であったのか、巷間の浮説はすでに定説化して行った。



・陶謀叛の後援者は思わぬところから現われた。豊後の大友義鎮である。

隆房は今度のことについて通じていた。義鎮は隆房の手紙を読んで喜んだ。

臣、義隆の疏斥する処となり、危急漸く迫る。因って廃立を図らんとす。

請う貴族一人を奉じて社稷を保たん

折返し「必ずや上きに計らうであろう」との返書が届いた。

背後を薩摩の島津義久におびやかされているとはいえ、ここで大内が滅ぶすれば、義鎮にとっては亡父同様都へ上るための障碍が無くなることになる。これは絶好の機会に違いなかった。

陶の謹慎事件を契機とする中国の動きの機微を、虎視耽々と窺う大友が見逃す筈がなかった。

強力な背景を得て陶は遂に踏切ったのである。

夏の夜は明け易い。筑山御殿は昨夜遅く迄行われた管絃の遊びのため深い眠りの中にあった。義隆の寝所近く流れる笛の音がかすかに聞こえ、それがかえって明りの静けさを強調しているかのようであった。

義隆が小ぶ目を覚ました。枕元の水を引き寄せて咽喉の乾きをいやそうとした。その時何となく館の周囲にただならぬ気配がした。――と、遠くで馬のいなきが聞こえた。

「今頃、何であろう」

（つづく）

表面上は主君より「不届きである」と詰問されている陶に対して味方する者ばかりはいない。毛利らが大内の客分であるが故に一歩後退した態度にして口をつぐんだ事は、隆房を苦しい立場に追い込んだ。彼には彼に同心した小数の朋輩と、先年来充実し寡をそいだ自衛戦力の頼みがあった。

陶謀叛の後援者は思わぬところから現われた。豊後の大友義鎮である。隆房は今度のことについて通じていた。義鎮は隆房の手紙を読んで喜んだ。

臣、義隆の疏斥する処となり、危急漸く迫る。因って廃立を図らんとす。

請う貴族一人を奉じて社稷を保たん

折返し「必ずや上きに計らうであろう」との返書が届いた。

背後を薩摩の島津義久におびやかされているとはいえ、ここで大内が滅ぶすれば、義鎮にとっては亡父同様都へ上るための障碍が無くなることになる。これは絶好の機会に違いなかった。

陶の謹慎事件を契機とする中国の動きの機微を、虎視耽々と窺う大友が見逃す筈がなかった。

強力な背景を得て陶は遂に踏切ったのである。

夏の夜は明け易い。筑山御殿は昨夜遅く迄行われた管絃の遊びのため深い眠りの中にあった。義隆の寝所近く流れる笛の音がかすかに聞こえ、それがかえって明りの静けさを強調しているかのようであった。

義隆が小ぶ目を覚ました。枕元の水を引き寄せて咽喉の乾きをいやそうとした。その時何となく館の周囲にただならぬ気配がした。――と、遠くで馬のいなきが聞

噫！出光萬兵衛翁

七月十七日付朝刊各紙上に出光万兵衛翁の訃報が伝えられた。

出光万兵衛氏（元舞鶴要港部司令官、海軍中将）十六日午前一時四十七分、心臓喘息弱のため平塚市の杏雲堂平塚分院で死去、八十一才。自宅は茅ケ崎市中海岸五の一〇。葬儀は十八日午前十一時から茅ケ崎市中海岸のカトリック教会で、喪主は二男達郎氏。

翁は宗像郡赤間町の出身。郷土の立志伝中の一人である。熱烈な明治神社信奉者で、生涯はその実践躬行に貫かれた。そして常に郷土を思い郷土の青少年の指導育成に意を注がれた。

この社報も三年有半の月刊紙を数えているが、最初その発刊の動機となったのは実に翁の熱心な示唆によるもので、社報と翁との関係は浅からぬものがある。去る昭和三十五年頃、社用で上京した久保宮司がたまたま同氏と歓談するところがあった。その折りに「是非共神社で新聞を発行して貰いたい。郷土の為に、郷土人士の育成のために何とかしていただきたい」

実に熱心に懇願されたということであった。そんなことがあって間もなく、昭和三十六年一月号より「宗像」が誕生発刊された。タブロイド版のささやかなものではあるが、始めてみると神社としても新聞発行の事は余程の事情が起らぬ限り中絶する事は出来ず、ますます重要性を増している。

始めは「宗像」も曾て今次戦争の前迄続けられていた宗像会機関紙の中絶を補うつもりであったが、その後昭和三十八年に宗像郡に「宗像会」が結成され、機関紙「宗像」も再興せられ、従って神社発行の新聞はそのまま社報に切り替えられた。社報宗像は四季折々の祭事について記載するほか、郡内の出来事や各地より寄稿せられた記事でますます発展し、すでに四十四号を数えている。

第一号は早速出光万兵衛翁に送られた。

一年頭に宗像誌創刊号を頂きました刹那、私の胸中は真に歓喜と感謝の濕巻の場となりました」

本当に喜んでいただけたのであった。顔来先生は三号より十一号に至る間「仰陽僑居雑問、日本過去自年の歩み、超喜愛出光万兵衛」と題して健筆をふるって下さった。侍従武官ともされた高潔な人柄が随所ににじみ出た文章であった。先生の心には、敗戦国日本を何とかして興隆させなければならないとの悲願があった。それには次代を背負うべき青少年を堅実に育成しなければならないというお考えであった。

――童問、とは、実際に先生の自宅に御近所の少年を集めて学習の面倒を見られた時の記録であるが、「宗像」に寄稿された原稿には童問を整理され皆熱心に御自分の主張を述べて居られる。中でも「教育勅語」は人倫の教典であると説かれ、それにつけても子女教育上の母性を尊重して

○明るくらくらも家をなすものは愛し火なりで主婦にこそあれと述べられたあたりは感銘深い。

「みんなの誕生日」と題して「国の起元」を説き、「もののはじめ」の忘るべからざる所以を聞かせ、「日本過去百年の歩み」に於ては如何にして明治時代の日本人が戦い抜いたかを諄々と教えている

○なんのその岩をもとおす梓弓同志ひきぬて祖国を興さむ

先生の御投稿の結びがこれであった。まさに遺詠というべきであろう。

先生の教を受けた人は沢山いる。旧海軍時代に接した人々は何れも何らかの教訓を得ている。現在の海上衛隊の幹部に当る人々のうち、多くの人が人生訓を学び実践しているといわれる。

先生から最後に原稿をいただいたのは昭和三十七年一月号（第十三号）であった。数えて八十才を超えられた先生にはすでに人生の迷いは無かった。年頭所感として

○年老いて他郷に住めど古里の弥栄祈る初日仰ぎて

○ちりの世にこりにそめる人々の心を洗ふ心字池水

○十早ふる神の心にかよこそ加護をさづかる人なりけり

八十翁　仰陽

心静かな所感であった。

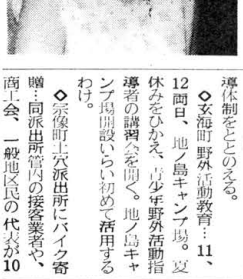
昨年の秋、先生の御夫妻がひょっこりとおいでになり参拝された朴訥にさえ見えるその和服姿に三代を養み続けられた気魂が窺われた。深い深い低頭参拝であった。

当社奨学生がミス日本に
――宗像町東郷の松井尚子さん――

夫る昭和三十五年より設定発足した宗像郡社奨学金育英制度は本年で第五年目を迎え、実社会へ幾多の優秀な人材を送り出しているが、この度、ミス日本に選ばれた宗像町の松井尚子さんは宗像大社奨学金第一期生である。

松井さんは明朗でハキハキしている美しいお嬢さんで、今春就職が決定すると直ぐ速お母さんと一緒に当社に参拝され、社務所に来られて「お陰様で日本生命に勤務する事に決りました。今後共よろしく」と挨拶されたのであった。

奨学金運営委員談「当宗像大社奨学生の中より日本一が選ばれた事は誠に喜ばしい事である。この育英制度は他の育英制度とその選定基準が異なっている。それは学業成績だけにとらわず、貧富を問わず、人間そのものを問題にしている点である。今般松井さんが選ばれた事を聞き、外形の美しさと云うよりも、松井さんの内面的な美しさ、清純さが買われたものと私は思います。」



町村往来

◇海水浴打ち合わせ…2日午前9時、津屋崎海水浴場開き…6日午前11時、福銀横の広場。津屋崎観光協会主催　西日本新聞社後援。

◇警友会宗像支部総会…16日午前10時半、宗像署。同会は一時中断していたが、郡内の警察関係者を集め、このほど、再発足することが決まり、初総会を開くことになった。

◇福間町水泳・安全講習会…9日午後1時　南町公民館。水泳初心者の技術指導、救助法、救急法の講習がある。

◇宗像町少年補導委員の委嘱式…9日午後2時、全町公館二階各部落ごとに二人かつ二人ずつ計九十五人を委嘱し、部落くるみの補導体制をととのえる。

◇玄海町野外活動教育…11、12両日、地ノ島キャンプ場。夏休みをひかえ、青少年野外活動指導者の講習会を開く。地ノ島キャンプ場開設いらい初めて活用するわけ。

◇宗像町土木派出所にバイク寄贈…同派出所管内の接客業者や、商工会、一般地区民の代表が10日宗像署を通じ贈った。75ccの新型。同派出所は4月、土穴、曲、須恵の三駐在所を合併して新発足、守備範囲が玄海町境から鞍手郡境まで広がっているだけに機動力強化に一役はたすものと期待されている。

◇宗像町青少年育成連絡会…13日午後2時、町村会二階ホール。町内小学校長、子供会係り教官。PTA会長、公民館分館長、補導委員会長、教育委員が参加。

◇家庭体育レクリエーション講習…14日午後1時、東郷小、講師テイチクレコード藤間勘寿絵。東京五輪音頭や手拍子音頭など指導。

◇宗像町赤間商店街の花火大会…14日午前9時半、農協本間支所裏の釣川で。14、15両日赤間区祇園祭りに協賛して、区、商工会主催で催される。14日昼は小学生リレー、城山中ブラスバンドの演奏会。

◇津屋崎町大石公民分館地鎮祭…26日現地であった。木造一階建て延べ百七十八平方メートル。一階はシーズン中は共同出荷場を兼ねたホール。二階に和室二間、炊事場もある。

（西日本新聞より）

五月浜と玄界灘を一望にする
白砂青松の釣川河畔に
新築落成　さつき荘
宗像郡玄海町神湊江口
電話　神湊　三十番

〃我が社の車を語る〃

話題をあつめる　マツダファミリア

ファミリアとはスペイン語で「家庭」「家族」を意味します。あなたのご一家のよきパートナーとして、ドライブにビジネスに欠くことのできない800ccワゴンタイプの魅力的な車であるところから、マツダファミリアと名付けられたのです。

マツダファミリアで……郊外に出よう……日本のカントリーカー、マツダファミリアの性能は、あらゆるテストや実験にパスした保証つきのもので、技術革新のマツダが総力を結集してつくりあげた画期的な高速力能車です。

直線を強調したフレッシュなスタイル

スタイルは鋭い直線を生かして、ダイナミックな線でまとめられています。フラットデッキのボンネット、リヤは思いきった傾斜角度をもち、そのシャープなスタイルにはスポーツカーなみの高性能を秘めています。

ボディーカラーは、スタンダードが青磁を思わせる「セイジブルー」、デラックスは、ほうき星のブルー「コメットブルー」で、シックなハイセンスの欧州車ムードがあふれています。

このクラス最高、水冷800cc42馬力の高性能エンジン

キャロルのエンジンはすでに定評のあるところですが、ファミリアのエンジンもこのすぐれた経験と技術にもとづいて完成されたのです。もちろんエンジンの本格派、作動音がきわめて静かで耐久力にすぐれた水冷直列4シリンダー4サイクルのエンジンで、総排気量782cc、最高出力42馬力の高性能エンジンを搭載しています。

さて、出力42馬力というのは。このクラス最高の数値ですが、エンジンの総排気量が各車まちまちなので、ある一定の単位でもって計算し、比較するとよくわかります。この単位を1000ccとして計算されたのがリッターあたり馬力というもので、その数値が大きいほど優秀なエンジンとみるわけです。

リッターあたり馬力＝最高出力×1000／総排気量

にこの式ファミリアの数値を入れて計算すると

(42PS×1000)÷782＝53.7PS

となり、リッターあたり53・7馬力という数が得られます。むろんこのクラスでは最高の数値です。

なお、シリンダーヘッド、クランクケース、ミッションケース、クラッチハウジングなど、すべて熱伝導率のすぐれたアルミ合金のダイカストによる精密鋳造ですから品質が均一で鋳肌が美しいだけでなく、軽量化と冷却性能の向上に大きく役立っています。マツダファミリアに搭載されたエンジンは、マツダの技術ではじめて完成され、マツダの高速時代にふさわしい高性能エンジンです。

（福岡　マツダ）

宗像伝説　其の四十一
青柳種信の　沖津島防人日記（二）

筑前の国学者青柳種信が寛政六年に滞務を帯びて沖ノ島に往来した日記が、標題のものである。先月号に於ては彼が渡海し、約二カ月経過した所迄、その概要を述べた。今月はその日記の「下の巻」七月二日早朝、一の嶽（二四三米）に登る。島の峯三つ、特に白嶽が白い。対馬を遠望。新羅（朝鮮）は見えるような、見えないような。

○言さへく高麗のこきし矢星のやっことなりて仕へまつりし

そのほか、壱岐の島が見えた。

此の島の神は汚穢を忌み給うので、用を足せば怒り狂乱するという。よって竹筒を持って歩く。

四日、せみ鰯見ゆ。漁師らに鰯とりの話を聞いて旅情を慰めた。

五日、朝鮮から長い泛子（うけ）が流れ着く。切って花瓶にした。

六日、漁師ら、鰒を取る。青光りのする真珠を手に入れた。

○吾はもよ白玉得たり皆人の得がてにすとふ白玉得たり

七日、夜来の風に漁が寄せた。

○あやなくも来よる玉藻がうつくしみなれにたくへむ妹もあらなくに。

十日、漁師ら大島に帰る。そろそろ自分達も勤務交替をしようと思うが、神古の精集、神意のままに今暫く滞島することとする。

この島は「かしこくあやとおもふことも」あるので古来「不言島」（いはずのしま）といわれる。

十一日、白嶽の下で釣をした。勤務交替船の来るのが待ち遠しい。帰る日近き今頃になって島の「忌詞」（いみことば）がなんとなく解って来た。しかし古語は消滅している。

十五日、今月清し。海の底から出るように見える。始めての経験。

○よもすがら流るる月の影見れば浪のあなたやとまりなるらん

二十二日、午後二時。遥に交替船見ゆ。午後四時着島。あと一隻、一里ばかり沖にいると見えたが、俄に北風が吹いて海上が荒れた。舟子らが松火をあげて呼んだが、分らない。遭難したのではないか。夜が更けるにつれて浪の音が万雷のように響く。夜中の十二時頃、空少し晴れて月光が射した。と、悲しげな音がする。それっと火をあげて見ると、万死に一生を得た舟が着島した。舟人らは災事もしないで唯泣くばかり「考へも待つも悦びあへり」

廿三日、平穏だが、夕べのことがあるので帰る準備ができない。

廿四日舟出。

二三里ばかり出た所で「風あしと」引き返す。

廿五日、浪高し、海荒に滞籠。

廿九日、朝方より北東の順風。

十時舟出。五里ばかり出た処で強風となった。追手なので安心。午後四時大島着。先ず中津宮参拝。

八月一日、勝浦に渡る。一里半ばかり歩いて田島の辺津宮に参拝した。途中、鐘岬の景色が美しい「田島の社は神湊の奥一里にあり、宮所は山あいの田の中に在り。」

参詣後数々の社記を拝観した。

二日、大島見物。

○吾もみて人にも告げん宗像の皇御神の踏みしあと所

三日、早朝舟出、正午、相島着。髪くしけずり、衣服を改む。午前十時舟出。正午、荒津崎着。先ず国主に報告。家路を辿る頃はもう黄昏であった。庭や家居のたたずまいにも春秋をへだてたような気がする程であった。（H）

宗像大社献詠俳句作品集（廿）

津屋崎　渋田しげを
川底の砂採るこつ夕燕

津屋崎　占部　河童
夕立の来ぬ日は妻の不気嫌に

津屋崎　西住喜三郎
南に雲湧き山の駅茂冥

津屋崎　井浦　良介
風落ちて草矢を妻の背に放つ

津屋崎　占部真佐子
煩悩機刺り幼子の舌まわる

津屋崎　阿部　静子
空ジョッキー置かれ、屋上に夏月歛く

津屋崎　吉野　享志
白鷺の浴衣のそでを曲げ終る

津屋崎　香立喜一郎
熱水とりし香田に肥料撒く

東郷　小野　淡坡
第六鼓星ばたいて村祇園

東郷　小野　花居
濃紺の山並襞の夏涼し

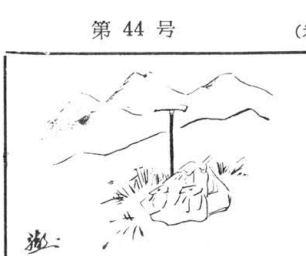
献詩

神湊　隣船　後

宗像神社十二境

(1) 辺津宮中津宮沖津宮

森々林下楢根辺　郷社村祠宮殿聯
鎮護国家神勅額　天孫臨降紀元前
無辺風月看不尽　海北臣南来往船
万里碧層雲与水　中津神社蹟荒川
嶮々林下霊泉水　鎮護沖津宮島岑
雲樹森々別大境　神風崇仰海潮琴



日立と共に五十年（三）

倉田主税会長の半生記

実にのんびりした話だが、主税は修猷館中学校の入学試験日を一日とりちがえていたのである。彼は最初から実業学校に入学するつもりではなかった。又、父も倉田家の長男たる主税には、中学校、高等学校、帝大というコースを歩ませる気であった。ところが、肝心の主税は試験当日に遠賀郡の伯母の家に遊びに行っていたのである。帰宅した翌日ノコノコと中学校へ行った。どうも様子が変に思われたので受験生仲間の一人に尋ねてみた。「試験は、きのうから始まっているんだ。お前はどうして来なかったのか」こういわれて、主税は仰天した。「しまった」いくら地団駄踏んで口惜しがっても、済んでしまった試験科目はとり返しがつくものでない。一仕様がない。自分が香気過きたのだ」スゴスゴ家に帰った主税は、ありのままを正直に告げて両親にあやまった。「そんなことでは将来が思いやられる」父は、さすがに苦虫を噛みつぶしたような顔をしてむすこの少年の姿を見ると「それ以上叱ることは出来なかった。母は　ふだんはどちらかというと父よりも子供達の教育について熱心に発言していたが、この時ばかりは、どうしたことあまり小言らしいことを言わず、ただ呆れたような表情を見せただけで終った。それだけに主税にしてみればガミガミ叱られる以上にこたえたのである"申訳ない"という気持は少年ながら十二分に感じたのだ。

「一年無駄にしたのだから俺はもう普通の中学校は行かない。三年で卒業できる薬学校に入学しよう」そう考えた主税は率直に両親に相談したところ、父はあまり気に入らない様子だったが結局、むすこの希望通りにさせて呉れ、母も別に反対をしなかった。こうして彼は一年棒にふって翌年の春たばかりの新らしい学校だった。その年即ち明治三十二年の秋に篠崎村に新校舎をつくって移転し漸く中学校らしいものになったが、科目は機械科のみで、それ以外には土木科も建築科もなく、まして電気科などという近代的な科は考えられもしなかった。

神興村から小倉まで通学することに興味小倉工業学校の入学試験にパスしたのであるが、今の子供達には入学試験の日取りを間違えるなどということは、想像も出来ないであろう。実にのんびりした話であるが、彼が如何にも大家の坊ちゃんらしく、鷹揚な性格であるかが想像されて興味がふかい。小倉工業学校は、五年前に開校したばかりの新らしい学校だったので、その当時の交通事情では不可能だった。主税は小倉の叔父の家から通学した。叔父は父の弟で慶次郎といい、小倉の神崎家に養子となり、家業の酒醸造を廃業して旅館を経営していた。梅雨によって小倉では一番旅館であった中等学校入学ということは、主税にとって一つの転機となった。

「人なみ以上の丈夫な体になりたい」こういう気持は、高等小学校の頃から既に彼の心に兆していた。両親の膝下を離れ、叔父の家に寄宿するようになったのを機会に、彼は冷水浴、タワシ摩擦を始めることにした。朝早く起きて風呂場で"ザアザア水をかぶり、亀の子タワシでゴシゴシ体をこするという"荒行"を断行することにしたのである。たとえ叔父さんの家であろうとも、番頭や、女中達など他人の沢山いるなかで生活するのであるから、主税の心のなかに"独立"といったような気持が生じていたのは当然であろう。そしてそういう気持が手伝ったため、思いきりよく、一見乱暴とも思える健康法を実行出来たのであろう。

いずれにせよ、この時始めた冷水浴を、その後数十年にわたって彼は実行している。"一旦やり始めた健康法をやめることは、意思薄弱と思われても仕方がない"という自戒が常に彼の心を支えた結果であろう。

何故、主税が修猷館中学校入学を諦めたとき、ことさらに工業学校に方針を転じたかということはあまりむずかしく考える必要はなさそうだ。要するに主税は、なんとなく工業学校というものに関心を引かれたのであろう。むずかしい理屈もなく少年らしい思いつきから入学してみたい気になったのであろう。但し彼が何となく関心を引かれ、その気になったということは、彼の素質に若干"機械いじりを好む"傾向があったのではあるまいか。ごく小さかった頃、父親の大切な懐中時計を持ち出してハラバラに壊わして大目玉を喰ったというエピソードが残っていることをみても、彼にそういう素質のあったことは想像出来る。

又、主税は、高等小学校卒業記念として、父親からカメラを買って貰った。アメリカのイーストマン社製のものであったろう。彼はこの贈物に驚喜した。どこへ行くにもカメラを持って行った。いや家に居ても、しょっちゅう撮影してばかりいたのである。父母や弟妹達はいうまでもなく、役場の人達まで写してやった。写ってやったりが能ではなかった。いや、その頃は現在と違ってD・P屋という商売はなかった。撮影から現像、焼付まですべてを自分の手でやりとげるのである。押入れの中に洗面器を持ちこみ、乾板に出てくる画像を待つ楽しみは格別だった。カメラに熱中したのも所詮は彼が機械いじりを好んだからであり、立派に写真技師として能力を発揮したのも、技術者として適格なことを証明するものと考えてよかろう。

（文責　養父　守）

神詣でのあれこれ（七）

片岡道信

次にお稲荷様についてであるが、お稲荷様というと直ぐ金もうけの神様という風に考えられるが、本来は倉稲魂命（うかのみたまの命）を主神とし佐田彦命と大宮能売命（おおみやのめの命）を奉斎した神社である。

主神うかのみたまの命は紫霞嶋尊のお子（古事記）とも伊弉諾尊の御子（日本書紀）ともなっているが何れにしても食物を主宰し給う女神で、稲荷というのは稲生（いねなり）から出たものである。猿田彦命は天孫降臨の道案内をした鼻の高い神であることは御承知の通り、おおみやのめの命は別命をうずめの命と申し、天の岩戸の古事で有名である。従ってお稲荷様は御饌神であり産業発展の神であるので、お稲荷様と狐との関係は私には判らぬが伏見の稲荷山にた狐が御饌神の稲穂から出来る調理を咬へて行く処から起ったものであろうまい。尚稲穂が産業に関係あることは大正年間⑤の帽章に使った事でも明らかである。

さて神社は冒頭に申上げたように二千年の政権、時代の変遷や戦争等によってその間に栄枯盛衰や、兵火に罹かる等のこともあり、現に終戦後GHQ歴史をもって居り、時の変り等によってその間に数年経った今日では大方の神社が国家管理をつけていた時に餘程近付き、祭事の如きは知って諸制約のあった戦前より盛んになった向が多い。只一般に別格官幣社が場所的関係もあろうが総じて衰微している。これは矢張り伝統的な氏子、又は崇敬者を持たない為と思う。同時に兵火や時代の変遷等その他を備えているものは少ないが、これが完備しているのは明治神宮と、八幡の高見神社など数社に過ぎないと思うが、改築せられた明治神宮は一見前の通りのように見えるが、改築後の神殿は前の神殿と拝殿との間にあった幣殿と拝殿とを一緒にしたものであるが、所謂幣殿を無くしたことは想像出来る。

そんな意味で神社参拝をなさるとき、多くの人が家内安全家業繁盛を祈願し、神職の祝詞は徒らに守り給へ幸へ給へと頼み事のみ多い。自分の努力精進なすべきは棚上げにして、そう頼まれては神様も聊か食傷して終われはしないかと思う。

朝礼

二礼二拍手一礼後
抜ひ給へ清め給へを三唱
二拍手一礼し終んで大神達に申し上げます。誠に行届かぬ者では御座いますが……
本日も大神達の御心を心として清く、明るく直く正しい気持で努力精進をさして戴きますので、色々な間違いも多かろうとは存じますが何卒誤ち犯すことのないよう御導き賜わりとう存じます。

二拍手一礼後
抜ひ給へ清め給へを三唱
二拍手一礼し
謹んで大神達に申し上げます。本日も大神達の御導きによりまして何とかすごさしていただきまして本当に有難く、厚く御礼を申し上げます。明日も又、一段の努力を致す覚悟で御座いますので何卒誤ち犯すことのないよう御導びきを賜わり度う存じます。

二拍手一礼。

（終り）

× × ×

夕礼

二礼二拍手一礼後
抜ひ給へ清め給へを三唱
二拍手一礼し
謹んで大神達に申し上げます。本日も大神達の御導きによりまして何とかすごさしていただきまして本当に有難く、厚く御礼を申し上げます。明日も又、一段の努力を致す覚悟で御座いますので何卒誤ち犯すことのないよう御導びきを賜わり度う存じます。

二拍手一礼。

（終り）

× × ×

第九回たなばた揮毫会入選者氏名

一年

特選　中村栄一（ヶ）貞松寛人（〃）福嶋つねき（〃）
金　中村栄一（ヶ）貞松寛人（〃）福嶋つねき（〃）
銀　えんどうあつ子（〃）やまもとこう一（赤間）ふなこしりつ子（大島）あそうしんすけ（赤間）なまなべわかえ（大島）

二年

特選　白石ひでと（玄北）
金　大竹けい子（吉武）中まんゆみ子（大島）福崎りえ（〃）
銀　中山久美（東郷）中のとも子（玄南）くべすがた ひろし（吉武）
銅　かまたやすのり（玄南）中村じゅん一（玄南）わたなべつとむ（赤間）よしたまたなお（吉武）かくきとしはる（玄北）やひろなお子（赤間）
銅　おとふじれい子（吉武）村山なつ子（大島）

三年

特選　青木元壱郎（玄北）
金　小野春夫（玄南）尾形えみ子（大島）村井信江（福間）
銀　芳村えみ子（赤間）花田洋子（吉武）馬中広子（吉武）村山さよ（玄北）馬場ゆき子（赤間）
銅　安永祐司（玄北）目原みち子（大島）岩佐くすみ（玄南）岩佐きち子（〃）永島正嗣（玄北）木村の り子（吉武）石坂みな子（〃）

四年

特選　船津英治（赤間）
金　中村幸恵（大島）山本いく子（赤間）吉田幸子（〃）佐藤元春（大島）
銀　村上末広（大島）早川実知子（吉武）河野伸子（大島）白木恵美子（吉武）桑野朗子（東郷）平川玲子（〃）中村真理子（南郷）
銅　永島恵子（玄北）橋正子（玄南）吉武邦子（東郷）大庭英夫（〃）山下英二（吉武）日石喜久美（南郷）
銅　力丸知博（東郷）力丸正秀（玄南）早川規子（吉武）白木孝子（〃）

五年

特選　花田千雅子（勝浦）
金　伏貫佐枝子（赤間）河野幸一（大島）芳村千秋（赤間）吉田厚子（東郷）大竹智子（吉武）
銀　須藤玲子（南郷）森啓子（神興）梅田恵子（赤間）乙藤とし子（吉武）尾形純子（大島）木南春美（赤間）中村秀信（南郷）
銅　中村幸子（〃）遠藤富美子（大島）森田敦子（赤間）小田秀和（東郷）福崎美保子（河東）池田なつ子（赤間）福崎隆裕（玄南）宮地俊博（玄南）白木洋子（赤間）遠藤澄男（大島）

六年

特選　大隅由紀子（大島）
金　村山康子（〃）吉野恵子（河東）
銀　薄田美江子（〃）大竹英俊（吉武）石井登美子（河東）石松寿代（吉武）高山国敏（吉武）井上登喜子（東郷）籔島安恵（河東）松下弘子（河東）占部三枝子（吉武）
銅　石津典秀（玄南）内野弘子（吉武）石松陽子（赤間）河辺繁春（大島）船越恵子（〃）大和佐由美（吉武）大丸昭子（南郷）樋口貴明（玄南）松本幸恵（神興）

一年

特選　吉田秀行（中央）
金　河野月子（大島）早川順子（城山）
銀　森たつえ（福間）大庭道子（中央）中村雄二（中央）
銅　天野あきえ（津屋崎）谷口玲子（中央）福崎勝子（大島）天野清香（津屋崎）沖西美知子（大島）

中学

特選　大隅香津子（大島）
金　高石真理子（大島）坂口美紀子（〃）福崎博見（〃）
銀　花田由美子（津屋崎）広島邦子（大島）河野立美（〃）坂口雅文（〃）藤島みのり（〃）
銅　荻原あや子（津屋崎）高石貴（大島）河野立美（〃）坂口雅文（〃）藤島みのり（〃）

中学

特選　河野明子（大島）
金　荻原喜美子（津屋崎）遠藤伸哉（大島）
銀　村井之代（福間）中村美己（大島）遠藤瑠（〃）
銅　沖西百合香（〃）谷口美子（津屋崎）板矢まり（大島）佐藤隆敏（〃）福崎博見（〃）

（一頁より続く）

戸畑　山磨　昌子

真紅の橋に立体交叉し大らかに孤を画く虹の七色の彩

宮田　片山　朝子

均されて貌変へゆく区の山の森林都市のさま語り合ふ

原町　中村　幸

入りきはの赤き夕日は見えかくれしつつわれらの車を離れず

東郷　藤崎　辰子

一ところ赤土見えてみどりこまびれふかい山に雲は晴れゆく

〃　藤田　信子

弧を画ける銀燕の翼きらめきて農夫せはしく代掻きてをり

宮武　高山徳七郎

梅雨晴れの跡あざやかに色映えて鎮守の緑目に新しく

コロラド　浦野　薫

帰日して香椎に住むと言ふ君と唐原にいる叔母の恋ほしも

田島　力丸　登

小魚の死して浮びぬ

戸畑　伊規須ゆき

くろく突きでし草崎半島の山裾一つともれる暁けのともび

（神湊にて）

田中ハツセ

選者にはあらぬ夫よりほめられて自信を持ちて歌を作りぬ

門司　永島　哲夫

夏の夜の未だ明けやらぬ川原のいでゆに独り河鹿ききをり

吉留　高山　功子

紅さして銀のうぶ毛に輝ける桃をみつめてしばしナイフも

平井　土性　とよ

たゆみなき努力の跡を顧みていきづき思い老いて行く身を

吉武　原田　松代

今日も又吾の仕事と章を引く汗はす背を刺す夏の風吹く

田島　白雲　山人

恋に生ぐ意気地に誠ぶもろくしの男の子のいのちくしくはかなし

勝浦浜　永島　文子

幼児のかたく握り米と十円玉卵と眠り替へ笑みて草遊ぶ

名島　久保　房江

日蔭の朝のしじまに初なりの桃の実となり手のひらにのす

福岡　林　まつえ

孤高守る人のごとくに朴の花雑木林に高々と咲く

宮田　北原きみ子

苗代の種まき終へて帰る道カッコウ鳥の声なつかしく聞く

吉武　原田　リノ

いねし間も働きますか声立てて牛使います夫は寝言に

平井　河野　静子

店先のパインバナナを見るたびに住みにし昔の台湾を懐ふ

深田　中野　節子

大雨去りにこれる風呂に浸りつつこの水源池の沖桐の花恋し

（簡易水道）

田島

我楽苦多告知板

（気候不順の折柄天候が気にかかる毎日が続く、或る日の午後

「明日のお天気はどうかねえ」すると、やおら下唇に手を入れたA君

「うん、このしめり具合では、明日は小雨？……というところかな」

○職員の誰かが急に具合が悪くなって便の小間物店をひらいたところが、遇々通りに行った職員のA君事もあろうに皆がお菓子をほおばっている席に来て小間物店の有様を微に入り、細に亘って説明。余りの事に一同食欲減退。所がA君、「汚いの何のって！」といい乍らお菓子をバリバリ。一同その余りのタフガイさに唯々唖然。

編輯部より

片岡道信氏の「神詣でのあれこれ」は好評裡に終了致しました。皆様の御愛読を感謝すると共に片岡氏に厚く御礼申し上げます。尚、来月号より先般から掲載の「あく常陸丸」を連載いたします。